

【神奈川】50代まで救急現場にいた教授「患者との思い出は心の宝石箱に」-中川儀英・東海大学医学部教授に聞く◆Vol.3

「断らない」「諦めない」モットーに洋上救急でも活躍

2025年2月28日（金）配信 m3.com地域版

「断らない」「諦めない」をモットーに救急医として50代まで現場に立ち続けた東海大学医学部（神奈川県伊勢原市）の中川儀英教授。「患者さんの思い出はいつも心の宝石箱にあり……」。2024年に救急功労者表彰総務大臣表彰を受賞した際にはそう大学のホームページにコメントを寄せた。救急医としての原動力になったという「宝石箱」の一つ、洋上救急で患者を救ったエピソードや定年を前にしての展望、医師として大切にしてきた思いを聞いた。（2024年12月12日オンラインインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら



ドクターヘリの前に立つ中川儀英氏（Facebookから引用）

——中川先生は10年ほど前までドクターヘリに乗っていたといいます。現在はどんな仕事に携わっているのですか。

救命救急センターの運営は現在、ドクターヘリの試行事業のころから一緒にやってきた守田誠司先生が主任教授としてけん引しています。私はセンターに所属はしているものの、基本的には大学本部にいて災害関係や学生教育に携わっています。

「災害関係」とは、災害時の地域医療体制を具体的にどう行っていくか伊勢原市と秦野伊勢原医師会、当院を含めた市内の病院で検討しています。既に防災計画はありますが、それはどちらかというと総論的なもので、現実ベースに落とし込んだものをつくろうとしているんですね。加えて、今はまだ発災時に医療者とほかの関係者とで顔の見える関係を築けていないので、定期的に対面でミーティングしつつ関係構築に取り組んでいます。私は県の災害医療コーディネーターも務めています。

洋上救急で救った患者からの「ありがとう」に感銘

——先生は、大学ホームページの救急功労者表彰受賞を知らせる記事に「患者さんの思い出はいつも心の宝石箱にあり……」とコメントを寄せています。印象に残っている患者との交流をお聞かせください。

救急医としては、「断らない」「諦めない」を常に意識してきました。私が楽天的な性格なのかもしれませんが、医療者から諦められてしまうような重症の患者さんでも、「何とかなるかもしれない」と思ってやっているときに良い結果が出ます。生死の境にいた患者さんが良くなり、「ありがとうございました」とお礼を言うてくださる経験が数年に1回あると、それがモチベーションになって何年も頑張れるんです。

そんな中で一つ印象的な症例を挙げるとすれば、洋上救急の患者さんです。洋上救急とは、洋上の船で傷病者が出たときに海上保安庁の巡視船や航空機で医師などを現場に送り、船などが患者を引き取って医師が救急処置をしつつ陸上の病院に搬送する制度。1985年に現在の公益社団法人「日本水難救済会」が始めた世界唯一の救急システムとして知られています。当院は洋上救急の協力病院であり、年に数回出動しています。

私が今でも鮮明に覚えているのは、東京から南に約1250キロメートル離れた硫黄島よりずっと先の海域で操業していたカツオ漁船の機関室が爆発し、航行不能になった事故です。このときは魚を冷凍するために使うアンモニアのガスが爆発し、それを浴びたり吸ったりした50代の機関長と17歳の機関士が目や気道に熱傷を負いました。気道熱傷を負うと窒息を起こす可能性があるため、私は2人に現在の状態と今後のリスクを説明し、気管挿管を行いました。

酸素を投与しながら病院に帰ってレントゲンを撮ると状態は悪く、2人とも集中治療室に入って治療を受けました。17歳の機関士の方が重症だったのですが、若い分早く回復し、1週間ほどすると軽快しました。私はほっとしてその男性の抜管を行いました。「これから抜くよ」と声をかけながら管を抜いたとき、座っていた男性はうつむきながら私の前に両手を出しました。何かと思ったら、私の手を握り、振り絞るようにして「ありがとうございました……」と言ってくれたのです。このときは本当にうれしかった。私は心を打たれながら「よく頑張ったね」と伝えました。なお、機関長も2週間ほどして抜管しました。

「医療こそ心」の精神で向き合えばニーズつかめる

——先生の半生を聞くと、大学5年の時に衝突事故に遭遇し、卒業した年に救命救急センターが大学に開設。さらに救急隊と関係を深めた翌年にドクターヘリの委託研究を行うなど、巡り合わせが続きますね。

タイミングに恵まれたところはあるかもしれませんが、私が医療者として最も大切だと思っているのは、「そこにニーズがあるかどうか」です。救急隊との連携もドクターヘリにしても、発展していったのは需要があったからでしょう。では、それをどうつかむか。私の場合は現場にいて、自分なりにそこにいる人たちと真っすぐに向き合ってきたからではないか、と思います。向き合い続けていると、「あれ？」と疑問に思ったり、「これはこうすれば……」と良い方法が浮かんだりしやすくなるのではないのでしょうか。

——東海大学の教授の定年は65歳といいます。残り2年と少しですが、今後の展望をお聞かせください。

大きなイベントとして、日本救急医学会関東地方会と日本航空医療学会の主催を任されているので、そこはしっかり準備したいですね。「医師としての遺言」といえば言い過ぎかもしれませんが、参加される方に向けて自分なりのメッセージを持って臨もうと思います。

私は下町・浅草の出身で、商売人だった叔母が私が小さなころから「人は心よ」とよく言っていました。叔母の価値観は私にも受け継がれており、私は「医療こそ心」だと考えています。患者さんと接するとき、他人事でなく心から心配すること。本当に「良くなってほしい」と願うこと。それが医療者の原点ではないでしょうか。働き方改革などで医師の環境も変わってきていますが、若い先生方には患者さんに向き合う姿勢や医師としての使命感を大切にしてください。

◆中川 儀英（なかがわ・よしひで）氏

1987年東海大学医学部卒。1990年同大救命救急センターに入局し、救急医療の発展に尽力。地元消防署に宿直して救急隊との関係を深め、2002年からは同大でドクターヘリも活用。2005年同大救命救急医学准教授、2018年同教授。2024年救急功労者表彰総務大臣賞を受賞。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

